

戸川幸夫動物文学全集

10

講談社



戸川幸夫動物文学全集10 凍原に吼えるほか

昭和五十二年三月十八日 第一刷

著者 戸川幸夫

装幀者 辻村益朗

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―十二―二十一 郵便番号一二二

電話東京〇三九四五―一二一(大代表) 振替東京八一三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

©戸川幸夫 一九七七年 Printed in Japan

目次

凍原に吼える	5	蒼蠅	128	対決	156	東京雀	170
狼捕り三十郎	184	北狐の挽歌	207				
砕けた牙	225	ライプツトの人喰虎	254				
今日も山は傾れる	268	象	286	政爺と獺	308		
虎は語らず	320	爪	334				
解説・尾崎秀樹	341						

凍原に吼える

密猟者の群れ

川はガリガリに氷結していた。

大地も、森も氷柱の中の飾りもののようにすっかり凍りついている。

そこには、暗い昼間があるだけだった。風さえも死んでいた。

蝦夷松や、樅松や、落葉松の枝にはずしりと重く雪がこびりついていながらも、その雪の塊は、かんかんに凍りついてしまっている。枝からすべり落ちようとはしなかった。

見わたす限りの世界が、すべて呼吸を忘れていた。

気温は零下三十度に達している。こんな寒い日は、北緯五十度に近い樺太国境でも、昼間では珍しい。

鳥も、北狐も、黒貂も、この寒さに逼塞してしまったのか影すら見せない。

すべてのものが、死に絶えたような世界だった。動いているものといえば、ゆらめく死の翳だけであった。

先住のアイヌ人たちは、この地をサハリン・モジリと呼んだ。それは「平原にして、波の起伏するがとき島」という意味であった。それが樺太であった。

アイヌ人たちがいうように、この島には著しい高峰峽嶺はなく、太平洋側から見れば波のうねりにも似た大地が南から北に向かって長く走っている。しかし、この島を北海道側から縦に眺めると東部山岳地帯、中央平原地帯、西部山岳地帯の三条の地形的変化を認めることができる。

東部山岳地帯は、北部のタライカ湾と南部の榮浜との間に、東海岸に沿った陥没地帯があるために南北に分裂している。北部に属するのは東北山脈と呼ばれていた。これはソ連領北樺太のツイミ東側を南下した山脈が、日本領に入って一〇三四メートルの振戸山や付近の山々をつくり上げたもので、その先端はタライカ湖の北岸に沈んでいる。またその余波はやや方向を変えて東南に走り、北知床半島の低い丘陵地となってオホーツク海に伸び、海豹島を先端にもつ北知床岬となって没していた。

南部に属するものはさらに東西に分かれ、西部は鈴谷山脈、東部は中知床山脈となっていた。

西部山岳地帯は、北海道宗谷山脈の延長であった。樺太南端の西能登呂岬に頭をもたげたこの山脈は、中央部を北上して北樺太のエリザベス岬に没している。これが樺太島の背骨をなすものであった。樺太に住む日本人たちはこの

山脈を樺太中央山脈と呼んでいた。

この中央山脈が日ソ国境に近いところで、最高峰の幌登岳（一三八二メートル）をはじめ敷香岳（一三七四メートル）その他の山岳群をつくり出していた。

そして、この中央山脈と鈴谷、東北両山脈に挟まれた低湿地溝が中央平原地帯であつて、樺太一の大河幌内川はここに在った。この川の河口はタライカ湾の敷香に開き、上流は国境を越えてソ連領ツイミ川流域の地溝帯に続いている。

この川——氷結したこの死の川は幌内川の国境に近い支流に当たり、ムイカ川と呼ばれていた。

万物、すべて死に絶えたかと思られるこの静寂の世界に、生きるものの気配が甦ってきた。

サクッ、サクッ、サクッ……水原につもった粉雪を舞わしてやってくる足音が伝わってきたのだ。

規則正しい歩き方——だが、獣ではない。いや、獣の足音も混じっている。しかし、獣の足音はずっと後方で、五百メートル以上も離れている。前の方を歩いてくるのは、たしかに人間だけの足音、それも一人や二人ではなかった。

やがて凍った川の上を歩いてくる人の姿が見えはじめた。一人、二人、三人……一列になった五人連れだった。

五人のうち四人は大人で、一人は少年だった。そして大人のうち二人は猟銃を肩にしていた。五人とも毛皮で裏張り

をした頑丈な防寒帽をかぶり、防寒服に、長靴をはいている。

先頭の男が、左手を挙げた。そこで続く四人の足がとまった。

先頭の男は、耳覆いをまくり上げて、あたりの様子にちよつと耳をすましたが、氣にすることもないので、口を開いた。

「ここから山サ^へ入る」

「国境は、もう直きだか？」

と次の男がきいた。

「もうすぐだ。軍用道路が川に沿つてあるから、この辺からは隠密行動をとらねばならねえ。国境では日ソとも、嚴重に見張りしてるから足あとを雪の上に残しちゃならねんだ。これから先は馴鹿^{トナリ}を使う」

それから、先の男はゆつくりと煙草をとり出した。

「煙草もこれから先は喫^のんでではならねえぞ。しばらくの喫み納めだから、ここで喫んでおけ、越境は今夜だ」

その言葉に男たちは思いおもいに雪の上に腰を下ろして喫煙をはじめた。男たちのズボンには海豹の皮で尻あてが貼られてあつたので、濡れる心配はない。

「寒いッ、ひとつ火でもおこすか」

と一人が立ち上がった。

「駄目だッ！」

と、最初の男が邪慳^{じよけん}に叱った。

「火は越境してから焚け。ここでは駄目だ」

「だって、国境までまだ三キロはあンベし……」

「駄目だといったら駄目だ。俺に指図を仰ぐ以上は、俺の言うことを聞け！」

「そうだ、又十」

と二番目の男が、火をおこそうといった男に注意した。

「安造のいう通りだ。山に入ったら安造の指図に従え」

やがて、下流の方から二十頭ほどの馴鹿の群れをつれて三人のオロッコ人が上がってきた。

「親方、交渉は俺にまかせといてくれ」

安造という最初の男が、二番目の男に言った。安造――

年齢は四十歳を一つ二つ越したところだろうか、眉が濃く、眼が大きい。顔色はあまりよくなく、痩せていて、濃い髭がもみあげから咽喉まで続いていた。

親方は、安造よりやや年上で背が低く、赤ら顔だ。

安造は立ち上がると、みんなから離れて、馴鹿をひっぱってきた三人のオロッコ人の方に近づいていった。このオロッコ人たちは、ここからずっと下流、ムイカ川が幌内川に合流する洲のところに小屋掛けをしている者たちだった。彼らは、ここで魚をとり、鳥獣を射て、原始的な生活をしているが、その実は日本陸軍の憲兵警備隊からの委嘱で、ソ連領から潜入してくるスパイを監視する役目もっている者たちだった。

しかし、彼らは密猟者は敵としない。彼ら自身が密猟を

するので、ソ連領に越境して黒貂をとっても、別に問題にしないのだ。それだけのことをするならば見のがしてやるわい――というのが、彼らの行き方だ。

安造は、このオロッコの連中と顔見知りとみえて、交渉はわけなくまとまった。

もどつてきて親方に、彼らが要求する額を告げると親方は、

「そいつは、高けえ、足もとを見たんじゃないか……町で買えば三分の一で手に入るぜ」

と渋面をつくった。

「そいつあ、仕方ねえですよ。奴らあ、わしらのことを憲兵隊に知らせることもできるしね。それに馴鹿だって、町でこれだけ買えばすぐに怪しまれる。奴らだから怪しまれないんでね。口止め料が入ってるんだから……」

オロッコ人たちが馴鹿の代金を受けとって帰ってゆくのを見送ってから、安造は一同に、

「これからのことを説明する」

と雪の上に一枚の手書きの地図を広げた。

「ここからは、森林の中をゆく。いまは午後二時だから、そろそろ日が暮れる。森の中は暗いが、灯はつけられない。声も立てられねえ。」

国境線は幅十メートルで、森林の木を伐ってあつて、まったくの見通しだ。監視哨は日ソ両方にあつて、越境する者は、見つければ発砲される。

監視哨の在り場所は、ここと、ここと……この黒い丸印がそうだ」

「ひやあ、いっぱいあるんだな」

「いいか、この付近はな、チシオ川特務機関警備隊、ムイカ国境警備警察、それに第一、第二、第三憲兵警備隊などの分遣隊があつて警戒が嚴重なところだ。

国境の近くには、よく見ないとわからないような絹糸が、密林の下ばえの中に張つてある。黒糸は特務機関、白糸は憲兵隊が張つたのだ。この糸の長さは二里も、三里も続いているのよ。

朝になるとな、憲兵たちは軍用犬をつれて糸の見まわりにくる。糸の切れ方で、侵入スパイか、越境者か……、人間が切つたのか、野獣が切つたのかを判断し、直ちに本部に通報がとぶんだ。

だから、俺たちは、人間の足あとをつけちゃあならないんだ。皆は馴鹿に乗る。それから、一貫、お前は残りの馴鹿をひっぱつて一番あとから来い。お前は馴鹿の扱い方になれてるからな」

安造はひと通り説明を終えると、はじめて自分を見守つてゐる少年に眼をやつた。

「多吉、怖えか？」

少年は、ううんと大きく首を振つて、

「怖くなんかねえや」

と、勇気のあるところを示そうと胸を張つた。

ふん、と安造は鼻を鳴らした。多吉は安造の一人息子だった。女房のおよねが死んでから男手ひとつで育ててきた子供なのだ。多吉がいなけりやあ、安造だって密猟者にはならなかつたかもしれない。

安造は胸を病んでいた。自分の生命がそう長くはないことを知つてゐる。だから、俸のためにも、いくら残してゆきたいと思つてゐた。

安造は、腕のいい猟師だった。黒、北狐、鷲、貂、野生の馴鹿などが彼の獲物だった。だが、身体が思わしくなくなると、狩りにゆく日も少なくなつた。

金は欲しいが、きつい猟はできない。楽ではないにしても一度働けばごつそり金になるのは、黒貂狩りだった。黒貂は世界の毛皮界でも珍重され、海のラッコよりも高価に取り引きされる。黒貂の皮が四枚あつたら漁船一艘が買えるといわれた時代もあつたのだ。

黒貂の皮がなぜそんなに高価なのか、それは毛皮そのものがすばらしいことはいうまでもないが、シベリア以外では少なく、そのシベリアでもたくさんは捕獲されない。飼育して繁殖させることも困難だという条件が、その価値を生みだしているのだった。

日本にも黒貂はいた。樺太が太古の時代、大陸とつながつていた頃に、狼や馴鹿や狐などと共に移住してきたものにちがいない。

だが日本領南樺太では、もともと数が少なかつたところ

へ濫獲がたたって、北樺太にくらべると問題にならぬくらい少なくなつてしまつた。

ソ連領に行けば、黒貂がごくごくといふ——というのが狩人たちの垂涎の的だつた。

逮捕や銃殺の危険を承知の上で、国境を突破してソ連領にもぐりこんで、黒貂の密猟をやるうとする者が後を絶たないのは、一度それをやれば、暫くは左うちわで暮らせるからだつた。

しかし、実際には、出かけて行つてそれきり戻つてこない密猟者も少なくはなかつた。密猟者たちは、密猟者としてよりも、潜入スパイとして裁かれたからであらう。

越境しての黒貂狩りは、誰にでもできるといふものではなかつた。安造は、それができる貴重な密猟者の一人だつた。

彼は、前にも二度ほどソ連領に潜入していた。莫大なあぶく銭をつかんだ彼は、有頂天になつた人間の誰もがするように、酒と女と博奕に身をもち崩した。それが妻を自殺させ、わが身を病魔にむしばませる原因だつた。彼が己の愚かさに気づいたときは遅すぎた。

彼は、多吉のためにも、何とか金をほしかつた。

そのとき、誘いがきたのだ。

「そうよなあ……、だが中国との戦争このかた国境は日本側も、ソ連側もばかに嚴重に見張つていふというしなア……」

安造は渋つた。

「それだけに、うまくゆけば儲けも大きいといふもんじやないか。毛皮は山分けた。それにかかりはわしが出すでな……」

と自信のない親方は執念ぶかく誘つた。危険を冒すことさえ承知なら、条件は悪くはなかつた。

これが最後だ、と安造は思つた。たしかに黒貂の皮は値上がりしていた。彼の心は動いた。

親方に、同行を承知したとき、まづ先に頭にうかんだのは多吉をどうしたもんかな、という考へだつた。

「多吉はもう十二だ。ギリヤークやオロッコなら、立派に一人前の猟師として通用してる年ごろだ。お前のあとを継がせるにしても、連れてつて仕込んでくがいいべき」と親方が言つた。安造は、多吉を密猟者に育てあげる気はなかつた。密猟者なんて俺一代でたくさんだ、と思う。

だがもし、俺がつかまるようなことになったら、多吉は一人でこの世の中に放り出されることになるだらう。そんなら、一緒に連れていったがええ。それに……」

と安造は考へた。子供をつれた越境者だの密猟者だのはいから、国境線さえ突破すれば、見とがめられても却つて何とかうまく言い逃れができるのではなからうか……。

そんな目算から、連れてきた多吉だつた。だが、安造はこの場になつて、やはり敷香の町に残してくるべきではなかつたか、と迷いが生じた。

「多吉、ほんとうについてくるか？　もし嫌ならムイカの土人小屋に残ってでもいいだぞ」

安造は念を押した。多吉は、だがこれから始まろうとする大冒険に胸をはずませて、
「父うちゃん、大丈夫だよ」

樺太の冬は、夜の訪れが早い。午後三時になるともうあたりはうす暗くなってきた。

「じゃあ、そろそろ行くべ」

と安造が言った。一同が立ち上がった。

「俺が先頭だ。次に多吉、それから親方、その次が又十で、一番あとが一貫だ。鉄砲は俺と一貫が持つが……、一貫、俺が言うまではどんなことがあっても射撃してはならねえぞ。銃声は両方の警備隊にこっちの在り処を知らせるようなもんだからな……」

「うちゃあしねえさ」

と一貫が笑った。

「言つとくがな、国境付近には狼がいる。奴らあ、馴鹿の体臭を嗅ぎつけると、やってくるからな」

「狼が、まだいるのかい？」

親方が、ぎよつとしたように訊ねた。

「いる。それが、本当の狼だか、狼みたいになった野犬だかわからないが、どっちにしたって気の荒いことは狼だと

思つて下せえよ。

群れをなしていやすからね、なるべくせいづらの眼に触れねえように、こっそり行くつもりだが、何しろ奴らあ、腹を空かしてるし、それだけに鼻がきくからね……」

針葉樹の林に入ると闇が急に一行をおし包んだ。

ただ樹々にしがみついている雪、大地を蔽っている雪の白さが、夜光をかすかに反射して、ぼーっと視界に明るさを漂わせている。それがたよりだった。

見上げて、も、蝦夷松、蝦松の枝にさえぎられて夜空の星のまたたきもなかった。

月は遅くなつてから出る計算だった。安造はそれまでに国境を突破する予定だ。安造の計画では、馴鹿たちを、野生の馴鹿に仕立てて国境線を走らせる。監視哨のある開けたところでは馴鹿の横ッ腹にしがみついて、他の馴鹿の群れに混じつてゆけば、見つからない。これまでの経験で、安造はそれを知っていた。

国境付近の森林には、野生の馴鹿が多く棲息していた。彼らは食物を求めて、絶えず日本側やソ連側の森林を移動していた。だから針一本落ちる音にも聞き耳を立て、人の動きには眼ざとい日ソの国境警備兵も、馴鹿にはなれていて、意外に気をゆるんでいるのだった。

バサッ、バサッ、バサッ……馴鹿たちの蹄の下で、凍りついた雪が重い音を立てる。

馴鹿たちは忍び足で歩かないが、却つてそれがよいの

だ。熟練した警備兵は、部屋の中に居ても、それが馴鹿の足音だと知り、軍用犬すらも、風が人間の体臭を彼らの鼻に運んでこない限り、もの音に気づいても吠えようとしない。軍用犬たちは、人間に対してだけ能力を発揮するように訓練されているのだった。

安造は、それでも時々たちどまって、物音に注意了。この極寒の原生林の中でうろついている人間は自分たち以外にはないと信じていても、用心は最大の味方なのだ。

五時ごろに、最後の見まわり兵が国境線を通過する。仕事はそれからだ。

彼は、特に風の流れに気を遣った。森の中では風は死んでいても、開けた場処に出ると案外に動いているものだ。殊に国境線のように幅十メートルで東西に一直線に森林を伐りひらいたようなところでは、風が走っている。

風は人間の体臭を運ぶから、その臭いを消すために、馴鹿の体臭をより強烈にかき立てておかねばならない。馴鹿に汗をかかせることだ。

だが一つ困ることは、馴鹿の体臭が高まって体臭が強くなると、森林に棲む狼群に気づかれることだった。

狼群に追跡されると、馴鹿たちはどこにつつま走るかわからない。

とにかく国境を越えるまでが勝負だった。面白いことに、ソ連側は国境線は厳重に守っているが、そこを突破しさえすればあとはほとんど監視の眼が光っていない。国境

線を越えて四、五里も中へ踏みこめば、火を焚こうが鉄砲をうとうがお構いなしなのだ。

町へ入ってゆくことは危険だが、人煙まれなこの地帯では山の中にいれば二ヵ月や三ヵ月は人の顔を見ないですますことは普通だった。

安造は、真つすぐ歩かせていた馴鹿を左に方向を変えて走らせた。馴鹿はリーダーに従う習性があった。だから、安造の乗っている馴鹿が森の中を走りだすとみんながそれについて走り出した。

時間かせぎと、馴鹿たちの体臭を強烈に発散させるための運動だった。

安造は二時間ほどを、森の中をぐるぐると走りまわった。

たまりかねた親方が、

「安、何だって同じところを……」

と低い声で問いかけてみたが、すぐに、叱ッ！ という安造の声に口を閉じさせられた。馴鹿たちの足がとまると彼らの強烈な体臭が渦を巻いた。馴鹿たちは、それぞれ唇から白い泡を吹きだしてハッ、ハッと白い霧を吐き出している。

そろそろいいだろう——と安造はうなずいた。そこで、さあ行くぞーとみんなに知らせるために手を挙げた。その合図は三番目の親方までしかわからなかったが、先頭が動きだしたので馴鹿たちは歩きはじめた。

そのとき、左手の、ずっと森の奥でつん裂くような鋭くて細い、金属的な叫びが起った。

その声は、矢のように森の樹々の間をかけ抜けて五人の耳にぐさっと突き刺さった。

いや人間よりも早く、馴鹿たちを動揺させていた。先頭の安造の馴鹿がバタバタと足ぶみをして、ブウウウ……と恐怖のまじった警戒の低いうなりをあげ、それを聞いた他の馴鹿たちが、ど、ど、どッとどよめいた。

「狼だッ！」

と又十が言った。ものを言うのは法度になっていたが、言わずにいられたかったのだ。

「一貫、馴鹿を散らすなッ」

低い声で安造が命じた。親方は不安げに耳をすまして、次の叫びを聞きとろうとしたが、第二の叫びは起こらなかった。

「気づいてくれなければええが……」

と親方は願った。それから、再び行進が始まった。馴鹿たちはぞくぞくする恐怖に駆り立てられてか、自然と歩みが早くなる。

親方は馴鹿の背にしがみついて第二の叫び声が起こらないでくれ……と祈りつづけた。

第二の叫びは、しばらく起こらなかった。親方はホッとした。狼はたしかにいる。だが、奴らは遠くにいて、俺たちにはやあ気づいてねえのさ……きつと他の鹿でも追っかけ

てやがんだろ——そう思ったとき、第二の叫び声が彼を鞍の上で飛び上がらせた。

第二の吠え声は前よりもずっと近くで起こり、それに応えるように第三の叫びと、第四の叫びが左と右の森の中から響いてきた。

狼たちは仲間を呼び集めてるのだ——と思うと親方は、来なければよかった、と後悔した。

彼は越境密猟を甘く考えていたことに臍を噛んだ。安造や仲間の者だけでは安心してまかせられない。ごまかされるのが嫌さについてきたのだが、こんなことなら出資だけして、敷香の家でストープにかじりついていればよかった、と悔やんだ。

馴鹿たちは、だっと走り出した。こんどのは前の小走りとはちがっていた。馴鹿たちは恐ろしい牙から脱れるために、本気で走り出したのだ。

馴鹿の群れで、ふみしだかれた雪の上に、黒い影が、すべるように森の中から出てきてのしかかった。

その影は、ふんふんと臭いを嗅いでいたが、鼻を夜空に高くむけると、口吻を細めて吠えた。

ウォー、オー、オー、ウォーン……

はり裂けんばかりの強い主張をこめた謳いだしに始まったこの野性の歌は、長い胸いっぱいの怒号のあとで、哀愁

をおびた種族のトレモロで終わった。

呼んでいるのは、巨大な牡の狼だった。灰色の針のような体毛で蔽われ、背に黒色帯がうかび上がっている。耳は小さいが鋭く尖り、鼻梁は角張って三センチ以上はある。胸幅は狭く足はすりとして長く、足ゆびも長い。彼が森林や雪原での運動性に富んでいることがその姿から判断できた。まくり上げた唇からちりりとあらわれる牙は白くて長かった。シベリア狼に似たこの形態から見て、彼の祖先がシベリアの荒野からやってきたことはいまでもなかった。

狼は、もう一度、吠える。

すると、彼の召集に応じて、同じ形態の仲間が集まってきた。形や毛色はよく似ているが、最初の牡狼ほど大きくて堂々としたものはいなかった。

狼は冬季間は群れをつくる野獣であり、夫婦仲がよく、家族愛の強い動物である。それから考えても最初にここに姿を現した牡狼は、ここに集まった狼群の首長と考えてもよいだろう。

狼たちは、雪の上一面にまき散らされた馴鹿の臭いを嗅ぎ、新しい肉の饗宴に想いをはせて、空っぽの胃の腑がきりきりと痛んだ。彼らは首領にはやく追撃をしようとして、ヒューンヒューンと鼻声を出して催促したが、首領はまだ走りだすのをためらっていた。首領は、もう一頭の仲間が駆けつけてくるのを待っていた。

人間の考えだした時間にして、四、五分が経過した。

そのとき、雪を蹴散らせて駆けてきた狼がいた。首領はそれを見ると嬉しそうに立ち上がった。彼はその仲間を待っていたのだ。

顔に雪をかぶったその狼も嬉しそうに走ってくると、どんと体をぶつつけるようにして首領にしなだれかかった。首領はその狼の首すじを柔らかく舐めた。

それは彼の若い妻であった。首領にくらべたら三分の二ほどの小柄な体格だが、美しく、きびきびしていた。

彼女の肉体を蔽った毛皮は、しかし、他の狼たちとかなり違っていた。首領をはじめ、他の仲間が、いわゆる狼色の毛皮をしているのに対してこの牝は狼灰色にやや茶褐色の毛色が混じっていた。それがうっすらと紅をさしたように美しく彼女を粧わせていた。眼も狼流の三角形の切れ長ではなくて、やや丸くうるみを帯び、頬から顎にかけて白い毛色が勝っている。どこか犬に似たところがあつた。しかし、そんなことは狼たちには、少しも問題になることではなかった。

妻が駆けつけたので、首領は全群に進軍を命じた。彼らの疾走は雪の上にあつてもすべるような、なめらかさがあつた。

追跡は正確で、迅速だった。それは先頭に立つ首領の能力のすばらしさを示すものといえた。

彼の妻は、彼の左わきにびったりと寄りそって走った。

馴鹿の足跡は進むにつれて乱れていた。そのことは馴鹿たちが追跡者の接近に恐怖心を昂ぶらせて、懸命に逃げはじめたことを示している。

獲物は近い。

狼王は、もつと彼らを混乱させるために、追撃の足をときどき止めては、絶叫した。

その豪快なる狩りの雄叫びには、林の中を……雪の上をさつと飛んでいつて馴鹿たちの心の臓につき刺さり、彼らの脚を萎えさせてしまう不思議な力を秘めていた。

「もう駄目だッ、おらあ射つぜッ！」

と一貫が叫んだ。

肉眼では見えないが、彼の動物的な本能が林の奥から殺到してくる狼群をとらえたからだだった。

一貫は、馴鹿の足を停めさせようとしてもがいた。

それから肩にした銃を片手ではずした。

「ばっかやろう！」

安造が、戻ってきてびんたを喰らわせた。

「何するだッ」

一貫は、激しい音を立てた頬つぺたを押さえて怒鳴った。

「撃ってみろ、みな殺しだッ。監視哨は近いんだぞッ」

「機関銃で死ぬ方が、狼の牙よりましだッ」

一貫も負けてはいなかった。

安造は、ぎらぎらと光る眼で一貫を睨みつけていたが、一貫の鉄砲を奪い取ると多吉に投げた。

それから、彼は馴鹿から飛び降りて、手綱を一貫に渡した。

安造が何をしようとするのかわからなかったが、一貫は安造の気魄に押されて、すなおに手綱を受けとった。

安造は、腰の山刀をぎらりと引き抜いた。

「ぎえッ！」

一貫は、命令に従わなかったので刺し殺されるのだと、悲鳴をあげた。

「ほざくねえ！」

安造はくるりと背を向けたかを見ると、一貫と同じように怖じ気だっている馴鹿の群れに近づき、いきなり一頭の頸に山刀を突っこんだ。

サツと散る血潮。はね上がる馴鹿。その馴鹿につけられた曳き綱を返す刀でずばり断ち切ると、馴鹿は血を噴きながら雪の上をはねまわり、やがてもんどりうって倒れた。

安造は、もう一頭も殺した。

「さあ、行くんだッ」

狼たちに餌として馴鹿を喰わせ、その暇に逃げるのだなと、初めて気づいた一貫は、

「兄貴、すまねえ」

と小声で詫びた。